

訪問日：2017.9.7 / エリア：京都

NPO法人 日本自立生活センター (JCIL)



回答者 矢吹 文敏さん (NPO法人日本自立生活センター代表)

アート・文化活動に関して思うこと

「文化で包摂する、文化に参加しましょう」と言うのなら、その前に、障害のある人の今日の社会的な立場をどう捉えているかを聞きたい。日常生活において積極的に文化に接するチャンスが障害者にはありません。文化や芸術に具体的に関わる才能やチャンスが無ければ、第三者から具体的に提案してもらってはじめて、話ができると思います。

その時の提案者が障害のある人ということをどのようなイメージを持っているのか、美化されたものへの当てはめ、既に固定されたものを持ってこられても、皆乗ってこないでしょう。

作業所で絵画や表現活動をするを京都市の文化芸術の部署が取り上げたとして、福祉の部署がそれを作業所で行う仕事と認めなかったらどうするのでしょうか。企画をするのであれば、取り組んだ結果何をしたいのか示してほしいです。ただ単に、子ども扱いをされた障害者が頑張って絵を描きましたというような評価では、あまりにも惨めで屈辱的なものでしょう。

JCILの基本理念に書いているように、人は人として生まれ、人として死ぬけれども、生きるうえでは天と地ほどの差がある。どのような差なのか、知らない、分かっていないのだという前提で提案して欲しいのです。

文化や芸術に参加するとして、舞台上に上がるというのは、まず車いすでは難しいのです。観客側の席は整備されてきましたが、舞台へ上るほうの入口には配慮されておらず入れません。スロープが短すぎるときもあります。そういう文化のバリアを取り除いてもらわないことには、参加しようよと言われても、なかなか難しいのです。

活動の経緯

東九条に来たのは、運動のためです。一人の重度障害者が施設から出たいという願いをどのように受け止め実現したら良いのかを考えることからJCILは始まりました。30年以上前のことです。施設から出れば住宅が必要で、住めるようにするには、大家さんや不動産屋に理解してもらわないといけません。ヘルパー制度がなかったから、ボランティアで介助者を付けなくては行けない、そういう自立生活の不安定さを支えるために生まれてきた運動です。

核となるのは差別をなくしていくという活動です。そして、既成概念を変革していくということです。私たち人数の少ないスタッフが駅ホームの柵をつけることを求める運動担当者、住宅改装の運動を勤める担当者、河川敷に車いすが入れないから役所に交渉に行く、そういったバリアフリー全体のまちづくりに関することを続けています。

JCILの基本理念にある、既成概念を壊していく、固定した考えを揺るがすことは、芸術の基本と一緒ではないかと言われればそうかもしれません。そういう活動を持ってきてもらえれば、こちらの活動と合わせられる可能性もあります。

文化的な活動に近いこととしては、言語障害の人も含め、体験談を持ち寄って作る寸劇があります。差別をなくすことを目的にしています。ボランティア講座も実施していて、中高生に話をすると、車いす体験をしてもらいます。自分たちの権利要求だけでなく、社会全体を良くするためのボランティア育成・養成もしています。

人が人として生きるということが障害者側に実現していないことに対し、人権意識を持った人々の応援を得ながら、障害者自らの力と支援で隔離的で庇護的な環境から脱却し、自立生活を推進するための運動拠点として設立。地下鉄のエレベーター設置、路線バスの自由な乗降、自立生活を確立するための介助者育成、駅のホームドアの設置など、広い意味でのバリアフリー運動を展開し、障害者の人権獲得のための多様な活動を行っている。

〒 601-8036
京都市南区東九条松田町 28
メゾンガラス京都十条 101
TEL: 075-671-8484
FAX: 075-671-8418

地域との関わり、まちづくり活動について

東九条マダン実行委員会には、JCILとして1回目から参加しています。はじめは8割9割方お客さん扱いをされていました。そのうち障害者と一緒に酒が飲める、タバコも吸える、猥雑な話もお互いの悩みや差別されている現実的な話もできると分かってきて、だんだんと立ち位置が変化してきました。マダン劇・音楽・イベントに参加する積み重ねの中での変化です。マダンは他の地域と違い、在日と日本人と一緒にやっているからいいところがあると思います。

地域の連絡会議にも JCIL は入っているけれど、まちづくりの活動に障害者が入れること自体が珍しいのです。障害者は結果についてだけ文句ばかり付けると言われることが多いけど、その前に議論する段階で話に入れていないことが多いことを知ってほしいと思います。

行政に求めること

アートフェスタのようなこともやっていますが、芸術品として売れるようなものではなく、まだまだ素人の作品しかできません。しかし、このままいつまでもただ飾ってあればいいのか、子どもの作品展のようなものでいいのか。例えば、やればもっと伸びるんじゃないかという人がいるなら、ボランティアで先生を付けてもらえるとか、行政がサポートしてくれるということがあればいいかもしれません。

求めるのは、やはり社会参加です。作業所で頑張るということだけではなく、みんなと同じ日常の場面に障害のある人も普通にいるということを求めています。